

COLUMN
未来を語ろう

case 4

観光業

アフターコロナを見越して それぞれの地域の魅力を磨くとき

被災そしてコロナ禍と、次々起こる厳しい現実に向きあわざるを得ない観光業。宿泊施設や複合施設の運営に携わる3人には、「被災とコロナ禍を越えて」をテーマに、東北と観光業の未来について語ってもらった。



岩手県釜石市

浜への料理宿 宝来館
岩崎 昭子氏

1963年創業の旅館の“名物女将”として、被災経験を語り継ぐ。また、釜石市の2019年のラグビーW杯招致や、旅館が所在する鶴住居地区の東部・根浜地域の復興活動にも精力的で、地元住民に大きな勇気を与える存在となっている。



宮城県女川町

ホテル・エルファロ共同事業体
佐々木 里子氏

佐々木代表をはじめ女川町で30年以上旅館業を営んでいた4つの被災事業者が集まり、2012年に設立した共同事業体。トレーラーハウスによる宿泊施設「ホテル・エルファロ」を営む。交流・滞在の拠点として、多様な来訪者を迎え入れている。



宮城県仙台市

株式会社深松組
赤木 好文氏

アクアイグニス設立準備室室長として、複合施設「アクアイグニス仙台」に携わる。同施設は温泉と食の総合リゾートとして、建設業を営む深松組などが設立した仙台 reborn 株式会社が、仙台市東部沿岸部の防災集団移転跡地(※)に整備。2022年4月に開業予定。

町ににぎわいを取り戻す 三者の取り組み

最初に、皆さんが取り組んでいる事業内容をご紹介します。

岩崎 岩手県釜石市の根浜海岸で、20室未満の小さな宿を営んでいます。67世帯の小さな村で、東日本大震災のときはうちだけが残りました。岩手県の多くの海岸沿いには高い防潮堤ができましたが、根浜海岸には東日本大震災前の松林が残っており、昔ながらの風景を楽しむことが当宿の魅力の一つ。今、地元の子どもたちは「3.11は未来を考える日だね」と言います。私たちも未来に向けての地域の在り方、そして、地域と共に生き残っていける宿業の在り方を模索しているところです。

佐々木 宮城県女川町でトレーラーハウス40台を使った宿泊施設「ホテル・エルファロ」を経営しています。東日本大震災直後、女川町には宿泊施設が無く、仙台から通うのに時間がかかっていました。そんな中、「復興スピードを速めるためにも女川に宿舎が欲しい」という声を受けて、旅館経営をしていた4つの事業者が組んで、被災の2年後にトレーラーハウスを使った宿泊施設を始めました。2017年に女川の駅前に引っ越ししまして、今は町一体となって、観光、水産、商業を盛り上げるべく、活動しています。

赤木 「ホテル・エルファロ」さんの駅前移転の竣工式に出席させていただきましたよ。女川は駅から海が見えることを大事にされ、防潮堤を作らなかった。すごく面白い町ができたと思いました。

佐々木 その節はどうもありがとうございました。

赤木 当社は、地元の総合建設会社で、温泉と食の複合施設「アクアイグニス仙台」の開業を進めております。「なぜネコンが？」と思われるかもしれませんがね。当社の社是に「建設業を通じて地域社会の繁栄に奉仕する」という一文があります。仙台市において、被災者の内陸への集団移転を進めた結果、利用されなくなった跡地に「跡地活用事業者」の公募があり、地域社会の繁栄に奉仕するべく、同公募に手を挙げ、三重県にある複合施設「アクアイグニス」のブランドやノウハウを使って、跡地のにぎわいを復活させるプランを提案。採択されて仙台 reborn 株式会社という合併会社を立ち上げ、2022年4月のオープンに向けて準備中です。



(左)宝来館1階のエントランスには、新日鉄釜石の選手のサイン色紙などラグビー関連の品々が飾られている(下)建物の前に立つ「津波記憶石」。行政や地域住民の要望と協力により設置された



「行ってみたい」場所をどう生み出すか

これからの被災地の観光業を盛り上げるためには何が必要でしょうか。地域のブランド化、商品化に向けた皆さんの取り組みを教えてください。

佐々木 女川は山あり、海ありで自然が豊か。ネイチャーガイド付きで山の散策もできます。でも、それだけだと物足りないと思ひまして、近年は観光と仕事を両立するワーケーションが注目されているので、「ホテル・エルファロ」でも専用のプランを販売しています。今はコロナ禍で多くの方が閉じこもった生活を強いられているので、自然の中でリフレッシュできるというのはすごく贅沢な体験。これからの時代のニーズに合っているのではと感じています。

岩崎 自然が豊かというのは釜石も同じです。今までの10年は被災の経験を伝えるなど、防災教育の場所として自分たちを発信してきました。今後はこうした被災地ならではの取り組みを継続しながら、より付加価値が高く、多くの人が訪れたい魅力ある地域づくりに力を入れていかなければならないと思っています。私たち宿泊事業者は魅力的な地域があってこそ、選んでもらえます。海、川、山、ラグビー、温かな人。こうした釜石の魅力を今まで以上に積極的に発信して、ブランド力を高めていきたいです。

赤木 「アクアイグニス仙台」でわれわれが大事にしているのは2つ。1つは「ぜひ行ってみたい」と思っていただけの価値のある商品構成です。「アクアイグニス仙台」では1万1,000坪の敷地内に天然温泉、マルシェ、ベーカリー、さらには和食の笠原将弘氏、スイーツの辻口博啓氏といった著名シェフがプロデュースするレストランなどを展開します。もう1つは、地域貢献です。集団移転跡地ということで、この土地に住みたくても移転せざるを得ない方々の思いを形にしたかった。その一つとして、地中熱を活用して二酸化炭素排出量を大幅に削減し、環境に配慮した施設を目指しました。また、温泉施設には元々の地区の名前を取って、「藤塚の湯」という名前をつけました。

佐々木 地元へ寄り添った名前をつけたんですね。ほかの地域の人には分からないけれど、住んでいた人にはすぐ分かる、と。

赤木 なんらかの形で地名を残すことで、移転した方々が「藤塚に住んでいた」と話ができますから。それが大事

だと思ったんです。

相互扶助で地域全体を盛り上げていく

観光客を呼ぶためには、施設単体ではなく、地域全体で盛り上げていく必要があると思います。地域での連携についてお考えをお聞かせください。

佐々木 東日本大震災によって、女川は変わらなければならませんでした。そのとき、すごく力強かったのは女川の「町民力」です。以前から有名な水産会社があり、旅館も、観光スポットもあったのですが、それぞれが独自でがんばっている状態でした。それが被災を経て、商業、水産、観光、行政が一つにつながり、団結したんです。小さい町ですから、どこかで困った人がいると耳に入ってきて、「うちはこれができるよ」と業界の垣根を越えて助け合うようになりました。この「町民力」が町全体を盛り上げてきたと感じています。

地域のつながりが深まることで、さらに魅力的な町になったんですね。

佐々木 そうですね。女川の最大のブランドは町民だと思います。県外から女川に来る方は、「あそこのおばちゃん、元気かな」という感じで親戚の家に来るような感覚の方が多くいます。宿を営む私たちもお客さんに対して、「帰ってきたのかい、久しぶりだね」と声をかける。こういう温かなつながりを得られることが、女川の観光地とし

岩崎 昭子氏の想い



これまでの10年を土台にして次のステップへ踏み出します

被災の経験を語り継ぎながら、子どもたちや地元の人々と一緒に釜石の未来について語っていききたいです。それを発信していくことで、地域のブランドが生まれるはずですよ。

Keyword

※ 防災集団移転跡地／被災者を高台や内陸部など安全な場所に移転させる「防災集団移転促進事業」により生まれた土地。市町村は「災害危険区域」に指定された浸水地域の居住に制限をかけ、復興交付金などの国費で宅地を買収した。



女川の町民力で もっと面白い町を目指します

「何度も帰ってきたくなる町」が女川の魅力。「町民力」で町の力を一つにして盛り上げていくとともに、新しいことに挑戦する若い人が住みたくなる町をつくっていきます。

ての魅力の一つだと思います。

岩崎 町全体での連携の前段階として、佐々木さんたちのように同業者の皆さんでタッグを組んで、被災後にいち早く宿舎を開業した動きが素晴らしいと思います。釜石は被災で残った宿が自助努力で再開し、復興の拠点となりました。あのとき連携して、一体となって町づくりの話し合いができていたら、もっと復興スピードは速かったかもしれません。被災経験を経て改めて思うのは、どんなコミュニティをつくりたいか、どんな生き方ができる町なのかを住んでいる人で共有しておいた方がいいということ。被害を受けた後ではすぐに動けませんから。そういう意味では、今私たちも釜石に温泉やスポーツを楽しめる場所をつくりたいと思っています。今度は土木や建築関係の人にも声をかけて、町ぐるみで一緒に取り組んでいきたいですね。

赤木 われわれの場合は新規参入なので、比較的自由に動いていると思います。仙台を訪れる観光客の多くは青葉城を見て、松島に行き、夜は国分町でうまい物を食べるのが定番コースです。そこでわれわれが目指しているのは、生意気かもしれませんが、「仙台には、ほかにも魅力的な場所があるよ」と自信を持って言える場所をつくること。「アクアイグニス仙台」の近くには観光果樹園や、週末に「ゆりあげ港朝市」が開かれる商店街などがあります。こうしたほかの事業者と連携していくことが地域を盛り上げるためには不可欠です。今はみんなで毎月集まって、「施設ごとの集客ではなく、バイエリア全体で、青葉城や仙台駅にきたお客さんを呼び込もう」と話し合っています。

集客を増やすためには交通面での課題を改善する必要があるそうですね。

赤木 仙台駅からバイエリアまでタクシーで行くと結構な金額がかかってしまいます。これが集客の課題になっていました。そこで、周辺の事業者と連携して、最寄りの荒井駅から無料のシャトルバスの運行を計画しています。観光客が気軽に来やすい環境を整え、さらに2〜3カ所をぐるっと回って旅を楽しめるプランを提案して、地域全体で集客して盛り上げていこうと取り組んでいるところです。

岩崎 私たち観光業はいろいろな企業さんと一緒に地域と空間をつくっていかねばなりませんよね。そのためには、目指すものを共有することが大事なのかなと思います。

町の未来に共感する 仲間を増やしていく

「ホテル・エルファロ」さんも女川でいろいろな企業と連携していますよね。

佐々木 当ホテルというより、女川自体がそういう町なんです。被災の後に「60歳以上は口出すな」という言葉が高齢の方々から生まれました(笑)。決して皮肉ではなく、若い人たちが働き

やすい町にするために60歳以上の人たちは見守ろうと。そして、自分たちの知識を伝え、外とつないであげよう、という意味です。「一度壊された町なんだから、今度は若い人が自分たちが好きな町をつくれ」というのが女川の人々の考え方。それが本当に実行されているから、移住する方も増えて、面白い町が生まれています。ほかの地域では外から来た人が新しいことをしようとすると出る杭が打たれてしまうことがありますが、女川の場合、「出る杭は磨かれてしまう」んです。

岩崎 とてもいい言葉ですね。

佐々木 女川には「あの人とつないであげるよ」「自分たちも手伝うよ」とお節介を焼く人が多くて。「また面白い人がやって来たな、何をしてくれるのかな」と、みんな、ワクワクして見守っているんです。

そういったコミュニティがあるから、女川が若い人が住みたいと思う魅力的な町になっているんですね。

岩崎 女川が被災地の復興をリードしている理由がよく分かりますよね。私も「出る杭は磨かれる」という気持ちを改めて持って、皆さんと交流していきたいと思います。釜石ではつながり人口を増やして、その中で釜石という町を維持するという考え方が最初からありました。元々鉄鋼の町で、外部の企業の皆さんと一緒につくり上げた町ですから。被災後も外の皆さんのエネルギーと知恵で引っ張ってもらってきました。でも、10年という節目を迎え、次のステージに進まなければと考えています。今、根浜界限には、移住して自らビジネスを立ち上げる人が集まってきました。自分たちがやりたいことや得意なことを発信して、町のみんな

(右)トレーラーハウスが並ぶ光景は非日常的
(下)自然光をたっぷり採り入れた、モダンなイメージの内装。子どもが喜ぶロフト付きルームもある



も参加できる。共感してくれる人が集まる仕掛けをつくり、地域を盛り上げていきたいです。

赤木 「アクアイグニス仙台」の運営会社は、私が所属している仙台の深松組で、地元の銀行とも組んでいます。運営ノウハウは三重の事例を持っていますが、われわれは仙台オリジナルのエッセンスを大量に入れています。その一つが、地元の酒造会社と組んだオリジナル銘柄の日本酒造り。地域を大事にしないと地元の人に来てもらえないし、地元の人が来ない施設には他県から人が集まりません。

地域を大事にすることは、若い人材の獲得にもつながりそうですね。

赤木 すでに「アクアイグニス仙台」で働きたいという方が多くいます。著名なシェフの店で修行したい、今までの店が閉店したので新しいチャレンジをしたい。いろいろな夢を持つ即戦力の方が集まっています。また、宮城県名取市の閑上地区には若いお母さんが多いので、パートで働きやすいように託児所の開園も予定しています。若い人材の流出を防ぐためにも、働きたいと思える環境づくりは大事です。

コロナ禍は次の成長に向けたチャンスでもある

コロナ禍の今、被災地に限らず日本中の観光業の皆さんが苦しい状況にあります。危機的な状況をどう乗り越えていけばいいか、皆さんのお考えをお聞かせください。

赤木 3.11のとき、自衛隊や警察の車両が被災地に入れるように救援ルー

トを確保したのはわれわれ地元の建設業界でした。そして、復興関連の公共事業が一段落したのが2019年くらい。やっと落ち着いて、本格的ににぎわいを取り戻す事業スタートできました。「アクアイグニス仙台」の提案を仙台市にしたとき、「これが仙台市の復興の集大成になるね」という話をしてくださって、非常にうれしかったです。今直面しているコロナ禍に関しては、アフターコロナを見越して客席などについて最大限で計画を立てている一方で、ウィズコロナの期間はそこから引き算で対応していく計画を立てています。最初から引き算した状態で計画を立てしまうと、プラスαを準備する費用が増えてしまうためです。ここ半年で世の中の流れは大きく変わってきました。次の半年後にどうなっているか、今はまだ分かりません。どんな状況になっても、より多くのお客さまに安心して楽しんでいただけるように、あらゆる可能性を考えながら来るべき日まで準備していきたいです。

佐々木 この座談会で、コロナ禍で改めて、普段会わない人たちのことを思

うようになったなと気が付きました。いつまでも被害者ぶるつもりは無いですが、被災経験は無駄ではなく、辛抱することを覚えました。その辛抱が今また必要な時期です。しかし、この状況はずっと続くものではないはず。2021年は東日本大震災から10年の節目ということで、再訪していただける予定のお客さんがたくさんいたのですが、残念ながら皆さんキャンセルになってしまいました。でも、来年か再来年、世の中が落ち着いたときにまたぜひ来ていただければと思います。当ホテルはトレーラーハウスという特徴から安全を確保しながら宿泊していただけますし、ワーケーションに対応するプランもあります。ウィズコロナの時代でも快適な旅を提供できます。今はもう少し耐えて、力をつけながら、皆さんが安心してお越しくださる日を待ちたいですね。

岩崎 東日本大震災から10年のタイミングでのコロナ禍。今はあのときと同じエネルギーでもう一度立ち向かっていかなければならない時期だと思っています。一方で、今はチャンスのもちでもあるはず。被災から10年、いろいろと取り組んできた中で、残ったものの、変えてはいけないもの、大事なものははっきりと見えてきました。コロナ禍を機に、これまでの10年を土台にして次のステージに踏み出していくことが大事なかなと思っています。今までやれなかったことに挑戦して、新しい人たちと手を組んで、釜石をさらに魅力的な町にしていきたいですね。



(上) 仙台市若林区藤塚に建設中の「アクアイグニス仙台」全体の完成イメージ (左)「温泉棟」完成イメージ。地下1,000mから湧出する天然温泉は「美人の湯」とも呼ばれる

赤木 好文氏の想い



「アクアイグニス仙台」を 仙台を代表する観光スポットに

「また行きたい」と思ってもらえる魅力ある商品をいかに生み出していくかが大切。地元の人にも観光客も、何度訪れても仙台を楽しみ尽くせる複合施設を目指していきます。